

★★

勝池レポート アジア資産運用アドバイザー 勝池和夫
「インド総選挙の結果と経済」

★★

6月4日に開票されたインドの総選挙では、与党連合は過半数を確保したものの、その中軸であるモディ首相率いるインド人民党は大幅に議席を減らしました。多くのメディアは、低所得者層の不満やモディ首相の強権的な政権運営への反発が、予想外な結果をもたらしたと報じています。更に、「モディ首相の求心力は低下している」「モディのカリスマは陰った」「インドの8%成長計画は危機にある」などと、この時とばかりに一斉に騒ぎたてています。

しかし、よく考えてみて下さい。

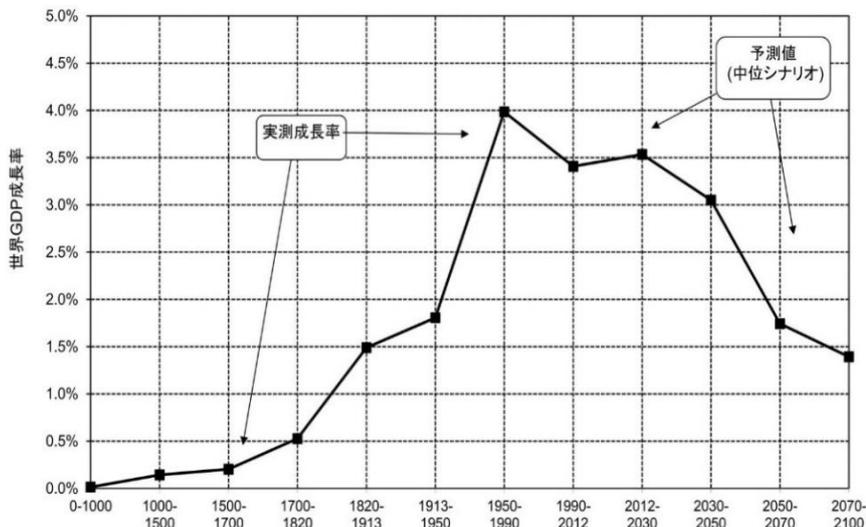
世界の政治家の中に、求心力が上がっている、もしくは支持率が高く安定しているリーダーなど昨今いるのでしょうか。その反対のケースがほとんどではないのでしょうか。

モディ政権には、今回の選挙結果は確かに痛手だったと思います。しかし、逆にインドの民主主義がしっかりと機能していることが、世界に印象付けられたとも言えます。モディ首相も3期目は政策の中心をより民衆の期待に沿うように軌道修正するはずで、彼はそう簡単にはへこたれない人物です。むしろこれを機会に、彼の求心力は独立100周年の2047年に向けて再び上昇すると予想しています。

ユーラシア・グループのイアン・ブレマー社長も、「今度のインド総選挙は抑制と均衡が作用して、インド国民には結果的に良い展開になるだろう」と指摘しています。私もこの意見に同意します。

また、経済に関して言えば、世界の何処の国がこれから経済を長期的に年平均8%以上で成長させることができるのでしょうか。以下のグラフを見てください。

図2.5 世界産出増加率 太古から2100年



これは、トマ・ピケティの『21世紀の資本』（みすず書房）にあったグラフです。古代から2100年までの世界のGDP成長率の変化を示しています。

ご覧のように、世界のGDP成長率は1950年から1990年にかけて約4%でピークを打っています。そして、現在は人類史上で初めての下降局面にあります。10年後には3%するすれになり、それからは2100年にかけてだんだんと1.5%程度まで低下していくと予想されています。

私たちの大半は世界経済が最も高い成長を遂げていた時代に生まれ育っています。ですので、成長というのは最低でも3~4%だという意識かも知れません。しかし、「私たちが一般に有する成長のイメージは幻想に過ぎない」とピケティは言っています。

そのピケティの見解を『ビジネスの未来』（プレジデント社）で紹介している作家の山口周氏はビジネスの歴史的使命について、「経済とテクノロジーの力によって物質的貧困を社会からなくすというミッションはすでに終了している」と述べています。

これらの見方が正しいとすると、全世界の株をインデックスで丸ごと買うような投資手法は、これからは余り有効ではなくなりそうですね。一人勝ちだと持て囃されているアメリカ経済でさえ、この先2%を超える成長は難しいでしょう。新NISAではアメリカ株が人気ですが、そんなに期待が持てるのでしょうか。

日本経済の先行きはもっと楽観できません。出生率が昨年1.20と過去最低を更新しましたね。もはや、国の経済の成長どころか国の存続が危ぶまれる状態です。34年ぶりの新高値だとはしゃいだ日本株のこのところのもたつきの裏には、日本の人口動態という極めて基本的な経済基盤の弱さがあるような気がします。

その基盤に日本周辺での地政学的なリスクがのしかかり、おまけに今まで日本を守ってくれていた国の、これからの経済力や軍事力の陰りを想像すると、とても日本株が長期で安心できる投資先だとは思えなくなります。

そこで浮かび上がってくるのがインドなのです。このように先進国を中心に減速が予想される世界経済の中で、インドは人口、テクノロジー、民主主義という強固な経済の成長基盤を備えています。農村部にはいまだに物質的な貧困が存在します。これからのインドには、その解消と豊富な人材によるAI革命により、つまり世界に追いついてゆく力と世界を飛び越えてゆく力の『二刀流』で、8~10%の経済成長率を達成する可能性が十分にあると思っています。

今回の総選挙の結果を受けて、私はインド経済と株式市場への自信を一層深めました。